## 診療実話

千歳医師会
こにし小児科医院　小西祥平（こにしょうへい）

開業して５年が経ち、いつもと変わらない土曜日の外来診療中の出来事でした。過去に受診歴のある小学生の母親より電話がかかってきました。話の内容は、子どもに発疹が出現し、他の医療機関を受診したところ麻疹の疑いがあるといわれたが、検査ができないため当院で検査をしてほしいということでした。紹介状はなく詳細はわかりませんでしたが、麻疹が疑われるなら他の患者との接触を避けるため、外来終了後に受診するように伝えました。

私が最後に麻疹患者の診察をしたのは20年以上前だったと思います。当時は麻疹が流行していたこともあり、コプリック斑、２峰性発熱、全身に癒合傾向のある丘疹など、教科書通りの症状と経過を辿る麻疹患者を数多く診察しましたし、肺炎を合併して入院となった患者の診療の経験もありました。その後の麻疹ワクチン接種の啓発のおかげで接種率が上がるにつれ罹患率も減少し、最近では麻疹患者を診療する機会はありませんでしたが、麻疹の診断には自信がありました。またコロナ禍の経験を活かし十分な感染対策を行い、車で来院するということだったので駐車場で診察を行いました。

診察時、全身状態は良好で発熱や咳嗽、鼻汁、結膜充血などのカタル症状はなく、顔、体幹、四肢に紅斑がみられたが麻疹特有の紅斑性丘疹ではありませんでした。麻疹が疑われるといわれなければ、最近受診が増えていた伝染性紅斑と診断して特に検査はしなかったと思います。しかし気になったのが、麻疹ワクチンを２回接種しており修飾麻疹の可能性はないだろうかということでした。ワクチン接種後に麻疹ウイルスに感染して発症する修飾麻疹は比較的症状が軽く、非典型的なため判断に悩みました。もしかしたら前医も修飾麻疹を疑ったのかもしれません。念のため保健所に連絡はしましたが検査結果をみてからの判断ということになり、発疹出現後４日以上経過した後に麻疹抗体の検査を行いました。その結果は陰性で周囲に麻疹罹患者もいないこともあり、今回は麻疹ではなかったと安心しました。

今回勉強になったのは、典型的な麻疹であれば比較的容易に診断できたと思いますが、現在、小児の多くは麻疹ワクチンを２回接種しており、周囲に麻疹の罹患者がいた場合に修飾麻疹の可能性も考慮しながら診療することが重要だということです。ただ伝染性紅斑でも麻疹IgM抗体が陽性になることがあり、診断には十分な注意が必要であると思われます。

## 岩見沢について

岩見沢市医師会
ささえるクリニック岩見沢　永森克志（ながもりかつし）

アイヌ語の「イワ・オ・サッ」→「岩見沢」になったという説と、開拓民が「岩（のように険しい地形）」を「見て」、「沢」に開いた土地という意味を込めて「岩見沢」としたという説があるようです。僕は、岩見沢は、湯が沸く沢、ゆわみざわが由来と聞いていましたが、どれが正しいのか、よくわかりません。

岩見沢の歴史は、明治時代の開拓期、1882年に北海道官設鉄道が岩見沢まで開通し、交通の拠点となったことが町の発展の契機となりました。

1890年代から空知地方の石炭産業が急成長し、中継地・集積地として、幌内炭鉱や三笠・夕張方面との連携により、鉄道輸送の拠点として活況を呈しました。

こうした背景から「鉄道の町」としても知られ、昭和初期には鉄道関連の職員も多く、活気に満ちた町でした。羊毛を手紡ぎし、その糸で手織りした毛織物ホームスパンを民間が日本で最初に生産しました。

1925年の全国副業博覧会で皇后陛下が買い上げるほど有名になったようです。意外な産業も岩見沢が最初だったりします。空知にはいろんなジンギスカン肉のメーカーがあるのもその影響なのかなとかと思いました。

農業も岩見沢の基幹産業です。石狩川流域の肥沃な土地を生かし、稲作が盛んに行われ、現在では北海道第二位の米どころです（2022年第一位は旭川）。また、小麦や大豆、野菜などの作物栽培、多様な農業が地域経済を支えています。近年は石炭産業の衰退を背景に、第三次産業への転換も図られてきました。現在も交通の要衝として、物流や人の流れが活発で、札幌圏への通勤圏としても機能しています。

医療面では公立病院の建物や設備が老朽化し、安全・効率性に課題があり、新病院建設と北海道中央労災病院との統合構想が進行中です。これに伴い総事業費は約483億円にのぼり、財政圧迫や市民負担増への懸念も強まっています。加えて、人口減少・少子高齢化により病床利用率が低下し、経営の持続性が問われています。

医療に関してはなかなか厳しい現状が続いています。

ただ、空知の中核都市として、岩見沢市医師会がよく奮闘していると思っています。